

に教育を施せば、少くとも吾々と同様の知識を持つやうになる。初めから少しも教へなければ色の名を知ると云ふことは出来ない。之れを反面から云ふと、若し教育の力を借るならば、多くの色の名を同時に覺へしむることの出来ること云ふ事になる。故に或る種の色の名が他の色の名よりも早く發達して居るとすれば、それは次の二つの理由から來て居ると云ふべきである。

(一) 其の色の名の發音が樂で、記憶が容易であること。

(二) 其の色に對する知覺が他の色よりも比較的發達し居るに依ると云ふこと、何故なれば子供が少しも識別することの出来ない色の名を知つて居ると云ふことは到底考へることが出来ないからである。(次號完結)

かゞり火の影も流れて長良川

下すうぶれの面白きかな

保育叢話 (承前)

光藤 ふで

○スレッツカラシな學生を世話せし實驗

十四五歳の少年で煙草は吸ふ、買喰は好き、女などの批評位は常の事、勉強嫌で遊び好き、人の悪口をいふ事がすきで、ふざける事が旨い、學校の成績は劣等で落第、寄宿舎に居りましたけれど、先生が持余して、退舎させられたといふ、手にも足にもおへぬ學生を預りました、
マ―何が故に此の子がかくまで情落しましたかと觀察いたしました、素より友達もよくなかつたでしようが、其様な事は末の事、唯保育者が教育を程よく仕なかつた爲と思ひました、否父母に眞の教育眼がなかつた故で御座いました。
この子の父は醫師として中流以上の生活をして居ります、母は柔弱なる身體の心も同じに唯我子可

愛いといふより外には何等の見識のない人でありました。

最初此の子がかゝるスレッツカラシとは知りませんでした。唯忙然よくないと聞いて居りました、丈の時、此子の母様が父様と御一緒にお出でになりました時、已に此の子の憎落の半以上此の母君にある事を悟りました。

良人と車をならべて、來られました母様は、良人の色の黒い堅そうな身體とは反對に、眞青な顔色に血の氣は殆んどない位、神經過敏の相があらはれて、誰れの目にも半病人、いつぞや、抱車夫が奥様は一丁の道も歩行なさる事は出来ないと申しましたが、後で聞いて成程と思ひました。

初對面の御挨拶がすみますと、私をお呼びになつて、奥様一寸籠でもと仰せらるゝから、ザルを出しましたら柿や栗や漬物や種々の珍らしい品々を下さいました、其のお言葉の大柄なる

事、舉動の不法なる、氣短な私にはすぐ癪に障りました、すぐつき返してやらんかとも思ひました、マ―遠方から汽車や、車でワザノ、持て來た品を無下に返すも、奥様は兎も角同伴の旦那様に恥をか、せる譯とチツト我慢して、色々ありがたうと禮をのべましたが、之によりまして大凡そ其の人格の卑い事は承知いたしました。

人に物品を贈るのには、皆夫れ、禮儀のある事は今日中流以下の噂でも心得て居ります、又上から下へ與へるにしても、其れ相當の守るべき禮儀があると思ひます、しかるに大切な我が兒を預ける先生の内に向つて、かゝる舉動のはの見ゆるは、人を馬鹿にしたと思へば腹も立ちますが、全くこの母様に其の辯のないといふ事が分るのであります、いづれの方面から見ましても、教育眼のない母様と判断を下すより外仕方はないのであります、マ―放逸無頼なる其の

子の悪徳は全く母様のお植付けになつた種子だと思ひました。

サ一此の厄介至極のお子をお預りしまして、今日まで一年半余りになります、其の成績はどうかと申しますと、最初の一學期間は尤も謹慎して勉強しました爲、成績も余程よろしく、殆んど生れて始めての好成绩で御座いました、所で両親の喜悅、先生も驚かれた位で御座いましたが、根が人の面前と陰とを區別するといふ傾向が大變にある子で御座いましたが、いろいろ尻の暖まると同時に、地金を現はし出して、私共の眼を偷みては、買喰をする、煙草を吸ふ、胃病は此の子の持病で御座いまして、毎朝粥を食べる其のそばから、餅を食べ豆をかちる、自己の好むものは、一向構はぬ、貪食するといふ風で、時々訓戒を加へられると、其の當時は、少し謹慎して居りますが、三日坊主で、又ゾロ自己流の我儘が始まる、しかし監督者の主人丈は何となく恐いと見えまして、一

度訓戒されると反省することが見えぬでもありません、マ一其の爲め今日までは、ドーヤラ面目を保ちて来る事が出来ました様なもので、前途はいかいと心配で御座います。マ一かゝる子は受持の先生も大變お骨折りで御座いませうし、監督當事者の心勢も察せられますが、はたから世話します私共下女に至るまでも小言の種子が多いで御座います、此の子の一言一行殆んど可愛らしい事なく、生意氣盛りで無理もないとは申すもの、下女等に對しては威張りちらし、食物の如何を口にし、履物、傘の如きに至るまで、自己のもの破損すれば、求めるといふ事なく、求めてと請求もせず、黙して、人の品をコン／＼用ふるといふ風は、一から十まで厄介物で御座いますが、しかし、不自由を知らぬ子でありますから、悪心を抱いて、故意にかゝる事をするのではなく、只放肆の結果なので御座います、實に此の子の悪徳は決して彼れ自らの罪でなくして、之が教養の任を

帯びたる責任である事を思ひますと、實に氣の毒の感じに堪えられない事があります、前車の覆へるを見て後車の誠めとす、實にかゝる悪徳は我儘増長の結果が多い事を目撃いたしました、我子も我儘に陥らぬ様注意するので御座います。』

春夏秋冬

みもすそ川も氷とけ

高倉山もかすむなり

うちとの宮のへだてなく

さかゆる春になりけり

古巢にこもる鶯の

老ごえのみと思ひしに

青葉がくれにほとゝぎす

なくはつ聲もきこゆなり

あきつ飛びかふ草の葉に

秋のはつ風吹きそめて

入目のかげのてりながら

ゆふべ涼しくなりにけり

しぐれしぐれの神無月

おく霜つきもすぎにけり

しはすは雪の寒ければ

うつみ火をのみ友として

○子供の望診

鹽野奇零

○人の體は病の器、人の體は病の器である。鬼をもとりひしく英雄豪傑でも病氣といふ敵には勝てぬ。即ち誰でも病氣にかゝらぬ者はない、そして凡べて敵を退治する最良の方法は敵の勢の揃はぬ所を不意撃ちするにある如く、この病といふ敵を退治するにも、病のさう募らぬうちに治療を加へるのが宜しい。どんな難病でも病氣の重らぬ中なれば癒らぬことは無いが、どんな軽い病でもいつまでも打棄て、置けば、生命にもかゝる程の大病となるかである。

○望診の必要、かう云ふ理屈はわからぬものもあり、又解つて居ても面倒だと棄て、置くものもあるが、中には輕症の中はこれが病氣かどうかにかゝるが、中にかゝるものが多いたうと思ふ。然し、氣のつかぬことが多いのがあらうと思ふ。然し、事の成るは成るの日にあらずして、重き病氣は一